大正末期から昭和前期における私立大学の併設中学校から上級学校への優先入学

松　本　暢　平

1．本稿の目的と課題

本稿は，大正末期から昭和前期（大学令施行前後）に焦点をあて，当時の私立大学と，その併設中学校（専検認定校を含む）との関係に着目し，併設中学校卒業者（第 4 学年修了者を含む）が，当該大学の予科等に優先的に入学できる制度（以下，優先進学）が，どのような理由で，どの程度頻繁に行われていたかを明らかにすることを目的とする。

これまで，教育の歴史社会学や教育史分野において，メリトクラシー研究の一環として，中学校の社会的機能に関する研究は数多く行われてきた。たとえば，深谷（1974）や天野（1983）は，中学校を高等学校や（帝国）大学へつながる「正系」ルートとみなし，激しい選抜競争と淘汰の行われる機関であったことを指摘した。その知見は，戦前期の日本社会における中学校像として，いまや広く共有されたものであるだろう。その後，先行研究をふまえながら，中学校の社会的機能をより詳細に検討した研究も進められ，たとえば，武石（2004）は，明治後期の東京の私立中学校に焦点をあて，それが公立の中学校や各種学校からの編入者を多く抱え，飛び級を認めるなどして卒業資格を早期に修得する手助けをしていたことを指摘した。中学校を対象とした研究ではないが，小針（2000）は，東京の私立小学校にとって，高い社会的威信を有する上級学校へと接続する教育体制（有名校への進学実績）を確立できたかどうかが，その存廃に重要な意味を持ったことを明らかにした。一連の研究から，「正系」である公立校とは異なる「傍系」としての私立校の社会的機能や位置づけが明らかになった。

本研究の問題関心により近づき，私立大学が設置した併設中学校を対象とした研究に目を向けると，江津（2007）は，大学令期の私立大学の併設中等教育機関と大学予科や専門学校等の上級学校との接続関係に着目し，学則や進路情報から，私立大学の併設中学校と大学予科や専門学校等との接続について，歴史学的分析を試みた。そこでは，学則に大学予科をはじめとする上級学校への優先入学が記載されている中学校がある一方，記載されていない中学校でも，上級学校への優先入学が行われていたことが明らかにされた。たとえば，同志社中学校においては，昭和 2～4 年度に，約半数が同志社中学校から同志社大学の予科ないし専門学校に，昭和 10 年度に，約 5％が同志社中学校から同志社大学予科に進学していた。関西学院中学部においては，卒業者の約 10％が関西学院大学予科に進学していた。江津のこの研究は，私立大学が設置した併設中学校と大学予科や専門学校との接続

関係について言及した初めての研究であると言える。しかし，そこで指摘された「約半数」,「5%」,「10%」といった値がどのような意味を持つのか，すなわち，その割合は高かったのか，あるいは，卒業者は望んでその進路を選んでいたのかといった点に，江津は言及していない。松本（2013）は，私立大学の併設中学校において，威信の高い高校への進学者だけでなく，大学予科への進学者も多くはなかったこと，専門学校等を選択する者も多かったことを指摘した。高校や大学予科への進学希望者がそもそも多くなかったこと，あるいは，併設中学校であっても，高校や大学予科へ進学できるほどの知力・体力・財力を有していた者は多くなかったことなどをその理由として推測できるが，その詳細な理由の検証は行われていない。さらに，松本（2013）は，一部の私立大学では，創設者等の経営層が，初等教育から高等教育までの一貫教育体制の確立を目指していたことを指摘したが，生徒やその保護者といった教育の受益者や，実際に教室に立っていた教員が，そのような「私学の理念」をどのように理解していたかについては言及していない。

このように，戦前期の私立校の社会的機能に焦点を当てた研究は，これまでにある程度行われてきたものの，その蓄積は充分ではなく，依然未解明な点も多い。先行研究はいくらかの課題を残しているが，その後，こうした関心にもとづく研究は進められておらず，戦前期，とりわけ大学令期以降の私立大学の併設中学校から上級学校への優先入学は，教育の社会史研究のなかで，いまだ明らかにされないミッシング・エリアになっている。本稿は，先行研究の限界に鑑み，私立大学が設置した併設中学校からの優先進学の意味について，それが利用された程度や，各私立大学併設中学校の生徒の進路に関する志向について，史資料を用いて検討する。それにより，優先入学という制度そのものの特質を紹介するとともに,「傍系」とみなされた私立校を経由したキャリア・パスを，教育の社会史研究のなかに位置づける。

以下に，本稿の構成を示しておきたい。第2節では，上記の課題を検討するための仮説を提示する。第3節では，分析に使用する史資料を紹介する。第4節では，明治大学の併設中等教育機関であった明治大学附属明治中学校と同志社大学の併設中等教育機関であった同志社中学校を事例に，併設中等教育機関から上級学校への進学について検討する。第5節では，上記2校以外の動向を検討する。最後に，第6節では，大学令前後における私立大学の併設中等教育機関から上級学校への内部進学の意味について，総括する。

2．本稿で検討する仮説

本稿では，上記の課題を検討するため，以下の2つの仮説を設定する。すなわち，(1) 私立大学が法的に帝国大学と同じ大学とみなされるようになった大学令期においても，私立校は依然として「傍系」とみなされていたが，その併設中学校では，他の中学校と同様に，上級学校進学をめぐる競争が行われていた，(2) 学則あるいは創設者等の経営層側の語りや意欲にみられたような，一貫教育体制の確立と，それにもとづく上級学校への優先入学を，実際に生徒はそれほど強く望んではいなかった，である。

３．使用する資料

本稿が依拠する史資料は，主として以下の２つである。第一に，私立大学の併設中学校の学友会誌である。とりわけ本稿では，大正末期から継続的に残っている明治大学附属明治中学校（以下，明治中学校）と同志社中学校のそれを中心に分析する。

第二に，昭和初期の全国の中学校の進路概況を記載した『公私立中学校生徒ノ異動並卒業者ノ上級学校入学状況調』である。

４．生徒の進学意欲

4.1．明治大学と明治大学附属明治中学校

はじめに，学友会誌から併設上級学校への進学状況をうかがい知ることのできる明治中学校に着目する。同校の学友会誌には，卒業者の寄稿による進学先の学校の紹介文が掲載されている。たとえば，水戸高等学校に進学したペンネーム「草の人」は，「此の度は計らずも校友会委員諸兄より小生にも高等学校受験並びに入学後の感想に就いて書けとのことに候ひしが」と投稿しており，明治中学校の校友会から，高校等への進学を希望する者に向けた受験案内や進学先の学校案内の執筆を依頼されたことがうかがえる。確認できる限りでは，こうした文章の掲載は，大学令以前の 1918（大正 7）年度から 1925（大正 15）年度まで継続されている。浪人を重ね高校受験を複数回経験した末に第一高等学校文科に入学した松金延三は，「明治中学校といへば私立では一二を争ふ程であるにも関らず，一高等への入学者の意外に少いのは全く其の学力が平均してゐるためであらうと思ひます。［中略］多くの人が無暗に一高へ入らうとするのは無意味であらうと思ひます。其れは一高に越したことはありませんが，新設の高等学校でも同じなのですから，殊に四年終了（ママ）の諸君は地方へ行かれると宜しいと思ひます。数回の失敗を押し切つて合格するのは非常に強い意志の所有者でなければとても出来ない事です。［中略］来るべき参月の試験には方々の学校へ一度で入学してください」（明治中学学友会 1920, p. 89）と寄稿し，高校受験において，東京の第一高等学校にこだわらず，全国の新設校を含む高校を選択肢に含め，ある特定の高校だけを志願し，そこに合格するまで何年も受験を重ねることのないよう説得している。私立校への進学者の寄稿も多く，早稲田大学の大学予科（早稲田高等学院）へ入学した掛下四郎は，自然美と自由な校風に触れ，「本当に早稲田高等学院は美しい学校です。皆さんお出でなさい。［中略］自然の美を愛し，自然の自由なる学問を尊ぶ方はお出でなさい。若々しい気分で，一心に勉強しませう」（明治中学学友会 1921, p. 66）と寄稿し，早稲田への入学を促している。

同誌には，他校への進学者の人数と氏名も掲載されている。試みに 1920（大正 9）年度のそれをみると，東京高等工業学校 3 名，東京商科大学予科 2 名，東京外国語学校 3 名，慶應義塾大学予科 10 名，慶應義塾大学（旧制度）10 名，日本歯科医学専門学校 2 名，明治大学予科 14 名，早稲田大学高等学院商科 1 名，同理科 1 名，同文科 5 名（明治中学校学友会 1920, p. 125–126）であった。高等学校進学者は別立てで掲載されており，第一高等学校 1 名，第四高等学校 5 名，第二高等学校 1 名，水戸高

等学校 2 名，山形高等学校 1 名（明治中学校学友会 1920, p. 127）であった。これらの進学情報から，1920（大正 9）年度に最も進学者が多かったのは，明治大学予科の 14 名であったが，10 名が高校へ，8 名がその他の官公立校へ，29 名の生徒が明治大学以外の私立校へと進学したことがわかった。特に，同校から慶應義塾へ進学した者は多く，専門学校令に規定された慶應義塾大学部への進学者を合わせるとその数は 20 名に達し，大学令に規定された明治大学予科を超えていた。慶應義塾では，各年度多数の卒業者が進学したためか，大学令施行後の卒業者の記述ではないが，「三田の学園にも亦，我明治中学の勢力が日を追つて移植されて行きます。今や母校を同じうするもの十余人，そこに三田明中会といふ美しい集ひは生れました」（明治中学校学友会 1918, p. 129）という寄稿があり，明治中学校卒業者による同窓会組織が形成されていた。

表 1 は，1920（大正 9）年度および 1921（大正 10）年度の，明治中学校卒業者（第 4 学年修了者も含む）の進学先を記したものである。全員を捕捉できていないが，ここからも，官公私立問わず，併設する明治大学以外の高校等への進学者が多くいたことがうかがえる。

4.2. 同志社大学と同志社中学校

次に，明治中学校と同様に，史資料から進学動向をうかがい知ることのできる同志社中学校に着目する。同志社中学校は，文部省訓令第 12 号により，中学校令による中学校としての認可を 1943（昭和 18）年まで受けておらず，卒業（修了）により高校や専門学校への入学資格を得られる，いわゆる「専検認定校」だったが，本稿では中学校に類する学校として扱うこととした。

同志社中学校の生徒の進路については，前節でとりあげた明治中学校のような資料が残されていない。そこで，卒業（第 4 学年修了）者による回想から当時の状況を推測した。同志社中学校を 1942（昭和 17）年に第 4 学年修了後，第三高等学校を経て東京帝国大学に進学し，のちにノーベル物理学賞を受賞した江崎玲於奈は，同志社中学校の同窓会誌への「思い出」という寄稿文において，「旧制第三高校受験にたいし，わがことのように叱咤激励してくれた先生たちの思い出」を述懐している。

こうした学校側の受験支援は，江崎のように高校等を志願した特定の生徒に対する例外的な対応だったわけではなく，江崎以外の生徒の回想からもうかがい知ることができる。たとえば，1929（昭和 4）年に同志社中学校を卒業し，のちに同志社中学の教員となった久永省一は，当時同志社大学になかった国文科に入学するため，「中学四年の一学期までは，私は旧製（ママ）高校を受験するつもりであった」（同窓会誌編集委員会編 1975, p. 32）（しかし実際には，野外教練が原因で体を病み，結果的に高校進学の夢は閉ざされてしまい，同志社大学予科を経て同志社大学に進学した）という。さらに，彼の回想のなかには，年上の同級生で，戦後大韓民国の李承晩大統領の幕僚となった任文桓について，「クラスには数人の台湾や朝鮮の人がいた。［中略］彼は六高，東大を経て，韓国の李大統領の幕僚の一人にまで出世した」（同窓会誌編集委員会編 1975, p. 30）と記されている。

なお，本稿の射程からは外れるが，同志社中学校が一貫教育体制を確立したのは戦後を迎えてからであったと推測される。同窓会誌によれば，戦後の学制改革による新制中学への改組にともなう変化

表 1　1920（大正 9）年度および 1921（大正 10）年度の明治中学校卒業者の進学先と進学者数

設置区分	学校名	1920 年度	1921 年度
官公立	一高	4	2
	四高	1	1
	六高		2
	八高	1	
	松本高校		2
	浦和高校	4	1
	山形高校	1	3
	弘前高校		1
	広島高校		1
	佐賀高校	1	
	松江高校	1	
	高知高校	1	
	水戸高校	1	2
	静岡高校	1	
	東京商科大予科	2	8
	北海道帝国大学予科	2	3
	東京高等工業学校	1	2
	東京高等工芸学校	1	
	東京外国語学校	1	1
	東京商船学校		1
	東京水産学校	2	
	海軍兵学校		1
	青山学院		4
私　立	慶應経済科		4
	慶應政治法学科		2
	慶應法律科		2
	慶應医科		1
	慶應文学科		1
	東京薬学専門学校		1
	早稲田第一高等学院		3
	早稲田第二高等学院		4
	明治大学一種法科	2	1
	明治大学二種法科		1
	明治大学一種商科	5	5
	明治大学二種商科	1	5
	明治大学二種英法		1

（単位：人）（明治中学校学友会 1920 および 1921 より著者作成）

として，男女共学化がそのひとつにあげられているが，それと同時に「新制度のもう一つの大きな特色は，中学から高校，高校から大学へと，推薦制による一貫教育でありましょう」（同窓会誌編集委員会編 1975, p. 43）と述べられている。これによれば，戦前期に，すでに優先入学は制度として存在し，結果的にそれを用いて上級学校に進学した者も一定程度いたが，併設中等教育機関から上級学校

への進学が広く普及したのは戦後であったと言えるだろう。

では，学校はこうした生徒の進学意欲をどのようにとらえていたのだろうか。同志社中学校学友会が発行した小冊子『彰栄の鐘』から，学校の進路指導の思惑をうかがうことができる。そこには，「家庭へのお願ひ」というページが設けられ，その1項目では，学校から新入生の保護者に対し，「本校は高校，官公立専門学校受験に一層努力を傾けるつもりですが，その基礎を培ふためにも，低学年に於ける自力学習の習慣はどうしてもやしなっていただきたい」（同志社中学校学友会 1938, p. 3）という記述が見られる。進学について，同志社の上級学校に関する記載がない一方，高校のようなより威信の高い官公立校への進学に関してのみ記載がある。また，同項目には，続けて，「本社中学からは地元の三高をはじめ，地方高校，帝大予科に毎年入学者を出してゐることは御承知のことゝ存じますが，四五年になつてあはてても仕方がありません。正しい準備は一年からの確実な勉強の習慣から！です」（同志社中学校学友会 1938, p. 3）という記述もみられた。上記の江崎や久永の回想や，同志社中学校の記述に鑑みれば，高校をはじめとする官公立校への受験者（志願者）が，彼らに限らず毎年いたこと，そうした他校受験者を同志社中学校が支援していたことがうかがえる。

5．その他の中学校の進学動向

これまで，明治大学附属明治中学校と同志社中学校に関する史資料を用いて，大学令期の私立大学の併設中学校における上級学校への進学動向を確認した。両校の動向に鑑みれば，併設大学の大学予科や専門部等に進学している者は一定程度おり，そのなかには，先行研究が指摘するような優先入学による入学者が含まれていたと考えられる。しかし，特に明治中学校の進学状況から顕著にうかがえるように，高校のようなより威信の高い諸学校を受験する生徒がいたことも明らかになった。では，両校以外の私立大学の併設中学校の状況はどうだったのであろうか。個別の中学校独自の史資料から進学先や進学者の実数を確認することはできないが，文部省教育調査部（1937）による『公私立中学校生徒ノ異動並卒業者ノ上級学校入学状況調』を用いて，両校以外の中学校の進学状況も検討したい。

表2は，昭和4年度の各中学校卒業者の上級学校進学状況を示したものである。明治中学校の卒業者数を基準としてみると，卒業者は103名で，高等学校のうち，官立校を志願したのは19名（18.4%）（入学者は8名）であった。大学予科のうち，官立校を志願したのは18名（17.5%）（入学者は3名），私立校を志願したのは69名（66.7%）（入学者は52名）であった。専門学校についてみると，官立校を志願したのは22名（21.4%）（入学者は4名），私立校を志願したのは22名（21.4%）（入学者は16名）であった。

私立大学の併設中学校のうち，進学動向をうかがえるのは，東京府では明治中学校以外に，日本大学中学校，日本大学第二中学校，日本大学第三中学校，立教中学校が，京都府では立命館中学校があるが，そこでは，明治中学校と同様に，私立の大学予科の受験者と進学者が最も多いが，高等学校や官公立大学予科を志願する者も一定数いることがわかる。

表3は，同年度入学者の卒業後3年後までの上級学校受験の状況を示したものである。公立の中

表２　各中学校の上級学校志願状況

所在地	中学校名	卒業者数	入学志願者数	大学予科			高等学校			専門学校		
			入学者数	官立	公立	私立	官立	公立	私立	官立	公立	私立
東京府	明　治	103	志願者数	15	0	69	19	0	0	22	0	22
			入学者数	3	0	52	8	0	0	4	0	16
	日　大	187	志願者数	18	8	54	31	3	17	16	7	101
			入学者数	2	1	31	2	0	1	2	4	62
	日大二	187	志願者数	3	0	115	8	5	0	8	0	0
			入学者数	0	0	86	3	4	0	1	0	0
	日大三	136	志願者数	0	2	68	50	0	5	5	0	25
			入学者数	0	1	16	4	0	3	3	0	14
	立　教	79	志願者数	3	0	33	21	5	6	14	0	17
			入学者数	0	0	28	1	0	1	4	0	5
	府立一	162	志願者数	59	2	136	203	132	116	18	0	24
			入学者数	9	0	11	34	16	14	3	0	8
	麻　布	243	志願者数	146	0	368	280	30	97	67	0	92
			入学者数	24	0	62	36	5	28	9	0	16
	開　成	162	志願者数	52	0	73	119	25	85	41	0	40
			入学者数	13	0	29	20	6	26	7	0	14
京都府	立命館	145	志願者数	0	0	76	41	0	0	0	0	22
			入学者数	0	0	75	3	0	0	0	0	16
	府立一	166	志願者数	9	31	13	130	3	2	13	10	26
			入学者数	4	12	9	77	1	0	3	4	23

文部省教育調査部（1937）より著者作成

表３　各中学校の卒業後３年以内の受験動向

所在地	中学校名	卒業者数	入学志願者数 カッコ内は，卒業者数に対する入学志願者の割合	２校以上志願者数 カッコ内は，入学志願者数に対する２校以上志願者の割合	入学者数
東京府	明治大学附属明治	103	75（72.8%）	13（ 17.3%）	53
	日本大学	187	158（84.5%）	50（ 32.3%）	75
	日本大学第二	187	160（85.6%）	不明	96
	日本大学第三	136	121（90.0%）	30（ 24.8%）	41
	立教	79	74（93.7%）	27（ 36.5%）	39
	東京府立第一	162	156（96.3%）	528（338.5%）	88
	麻布	243	215（88.5%）	627（291.2%）	143
	開成	162	162（100.0%）	125（ 77.2%）	60
京都府	立命館	145	92（63.4%）	28（ 30.4%）	69
	京都府立第一	166	156（94.0%）	39（ 25.0%）	92

文部省教育調査部（1937）より著者作成

学校と同様に，私立大学の併設中学校においても，7〜9 割程度の生徒が上級学校受験を志願していることがわかる。卒業者のうち，卒業後 1 年の間に上級学校を志願した者は，明治中学校で 75 名（72.8％）いた。日本大学中学校，日本大学第二中学校，日本大学第三中学校，立教中学校，立命館中学校ではそれ以上の割合の生徒が上級学校を志願していた。2 校以上を志願した者が 3 割程度いた中学校もあった。この傾向は，優先入学の権利を学力面や素行面の不備から享受できず，優先入学制度によらず併設大学の予科や専門学校を受験したために起こったと考えることもできる。しかし，先にとりあげた同志社大学予科進学者の久永省一による「大学の予科の時代はまったくつまらない不毛の季節だった。旧制高校の入学失敗者が多く集り，かれらの希望のない生活態度の中に交って勉学せねばならなかったからだろう。かれらが立直った大学時代にはまた新しい生活も待っていたが」（同窓会誌編集委員会編 1975, p. 33）という回想に鑑みれば，私立の大学予科の多くは，望んで進学したい場所であったとは考えにくく，生徒のなかには，併設大学の予科よりも少しでも威信の高い他大学の予科を受験したものもいたと推測される。明治中学校の学友会誌において，官公立校ではないものの，慶應義塾や早稲田のような，私立校の中では威信が高いとされた学校へ進学した者が多くおり，大学の併設校は，上級学校への優先入学を認める一方，「進学校」としての一面を併せ持ってもいた。

ただし，比較対象としてとりあげた東京府立第一中学校，私立校のなかでトップクラスとみなされていた麻布中学校・開成中学校において，私立大学の併設中学校よりも 2 校以上の志願者が際立って多かったことからは，私立大学の併設中学校が完全な「進学校」ではなかったこともうかがえる。また，比較対象としてあげた各中学校において，私立大学の予科への進学者数が少なかったことから，私立大学の予科は，高校等のより威信の高い学校を受験する際の「すべり止め」としてみなされて受験されていたことも推測される。現段階では推測の域を出ず，別稿を用意して詳細に検討せねばならないが，私立大学の併設中学校の生徒のなかには，浪人を覚悟して威信の高い高校等を積極的に志願した者もいただろうが，複数校受験し，より威信の高い上級学校に入ろうとするために激しい競争に身をおいた者は，名門校とみなされていた公立の東京府立第一中学校や，一部の有名私立中学校ほど多くはなかったようだ。

6．結語：内部進学の意味

本稿は，大正末期から昭和前期（大学令施行前後）に焦点をあて，私立大学が設置した併設中学校卒業による当該大学の予科等への優先進学が，どのような理由で，どの程度頻繁に行われていたかを明らかにすることを目的とし，史資料にもとづいて検討した。分析にあたり，2 つの仮説，すなわち，(1) その併設中学校では，他の中学校と同様に，上級学校進学をめぐる競争が行われていた，(2) 学則や創設者等の経営層側の語りや意欲にみられたような，一貫教育体制の確立と，それにもとづく上級学校への優先入学を，実際に生徒はそれほど強く望んではいなかった，を設定した。分析には，明治中学校と同志社中学校の史資料に加え，文部省教育調査部による『公私立中学校生徒ノ異動並卒業者ノ上級学校入学状況調』を併用した。

明治中学校の事例からは，明治大学予科をはじめとする明治大学関連の諸学校に進学した者がいた一方，学友会誌において，卒業者からの寄稿により，積極的に他校，とりわけ威信の高い高校等の官公立校の紹介や受験指南が多く掲載されていたことが明らかになった。同志社中学校の事例からは，高校等を志願する者が明治中学校と同様に一定数いたこと，さらに，学校側が彼らの上級学校受験を積極的に支援していたことが明らかになった。また，本稿の射程外ではあるが，下級学校から上級学校への優先入学が普及したのが戦後を迎えてからであったこともうかがえた。

各事例から，本稿は，私立大学の併設中学校における上級学校への優先入学は，制度としては存在したが，必ずしもそれを多くの生徒が望んでいたわけではなく，進学アスピレーションには差があったという知見を得た。ただし，本稿には，数多くの課題も残されている。本稿では，設定した上記2つの仮説について，ある程度検証することができたが，文字通り「ある程度」にとどまっている。明治中学校と同志社中学校の資料を主に用いて分析したが，これらの事例だけでは，私立大学の併設中学校から上級学校への優先入学をめぐる状況を普遍的に描くには到底いたっていない。他校の事例をふまえるべく，『公私立中学校生徒ノ異動並卒業者ノ上級学校入学状況調』を併用し，全中学校の動向について検討したが，上記2校以外の中学校独自の史資料も付加し，私立大学の併設中学校から上級学校への優先入学の動向を検討する必要があることは言うまでもない。残された課題について，別稿を用意し，ひとつずつ検討したい。

参考文献

天野郁夫，1982，『教育と選抜』第一法規出版（同志社社史資料センター所蔵）.

同志社中学校学友会，1938，『彰栄の鐘』同志社中学校学友会（同志社社史資料センター所蔵）.

同窓会誌編集委員会編，1975，『同窓会誌創立百周年記念号』同志社中学校同窓会.

深谷昌志，1974，「中等教育」国立教育研究所編『日本近代教育百年史』第四巻，教育振興研究所，pp. 1039–1130.

小針誠，2000，「戦前期における市立小学この存廃条件に関する歴史社会学的研究―私学一貫校としての制度化と併設初等教育機関の入・在学者数に着目して―」『教育学研究』第67巻第4号，pp. 450–461.

江津和也，2007，「昭和戦前期における私立大学予科と系列中等教育機関との関係に関する一考察」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊14号–2，pp. 85–96.

松本暢平，2013，「日本の私立大学の付属校に関する考察―戦前期におけるそれらの設置背景と内部進学―」『早稲田教育評論』第27巻第1号，pp. 153–164.

明治中学校学友会，1918，1920，1921，『学友会誌』明治中学校学友会.

文部省教育調査部，1937，『公私立中学校生徒ノ異動並卒業者ノ上級学校入学状況調』文部省教育調査部.

武石典史，2004，「明治後期東京における私立中学校の機能―入学動向・入学者の経歴の視点から―」『教育社会学研究』第75集，pp. 25–42.

ABSTRACT

Preferential Enrolment in Private Universities from Their Feeder Schools in Pre-War Period of Japan

Yohei MATSUMOTO

This paper discusses why and how the preferential enrolment in private universities from their affiliated feeder schools, which are currently called “FUZOKU” Schools in Japan, focusing on the pre-war period of Japan, especially, around University Order in 1920.

In the analysis, following two hypotheses were considered: (1) in feeder schools, there were the competition over other prestigious schools such as higher schools, (2) students did not really want the preferential enrolment in adjoining universities (preparatory departments or colleges).

Through the analysis based on the materials of the feeder schools of Meiji University, Doshisha University, and the Ministry of Education, the following three points were clarified: (1) there had been some students who take entrance examinations for the prestigious schools, (2) school-guides or hangs of entrance examinations were posted at Alumni Journals, and (3) feeder schools had supported the entrance examinations for prestigious schools other than their adjoining universities. According to the prior studies, feeder schools permitted preferential enrolment into universities on their school regulation, however, some students hoped not the preferential enrolment but taking entrance examinations of higher schools or other prestigious schools.

Key words: Private universities, Preferential enrolment, Feeder schools, Pre-war period of Japan